

## はしがき

### 本書刊行にあたって

“ソーシャルインクルージョン”，あるいは“ユニバーサルデザイン”の理念の実現に基づく社会の実現は，社会全体の普遍的な目的として認識されつつある。同時にこれらの理念は，国際的に，特に先進国において進行している高齢化社会とのニーズと相まって浸透し，進化を遂げている。そして，これらの思想や理念を達成させるためには，排除されている人を包摂することがそのプロセスに含まれるが，本書は其中でも，障害者ジェンダー統計というアプローチから障害者の実態に迫ることをねらいとしている。より正確な統計情報によって，すなわち障害者の実態を可視化することで，“ソーシャルインクルージョン”や“ユニバーサルデザイン”を実現していくための近道につながると筆者は考えている。

では，障害者統計整備の重要性は世界全体でどの程度共有されているもののだろうか。詳しくは本書の随所で述べていくが，国連の障害者権利条約やSDGs（持続可能な開発目標）では，政策・施策立案のためにエビデンスに基づいた障害者統計，そして障害者ジェンダー統計整備の重要性について言及されている。

しかし国際的にみても障害者ジェンダー統計に関する研究はかなり限られており，その蓄積は決して多いとはいえない。また，障害者統計を取り巻く社会的背景について詳細に触れた研究も決して多くはない。障害者統計研究が進んでいないというこの事実は，結果的に障害者の生活の全体像をみえにくくしてきた。では，統計が充実すればどうなるのか。障害とジェンダーの視点を結びつけた統計の充実が障害者の生活を変えることができる変革の道具になるのだろうか。こうした視点から研究や政策に取り組んでいる国はあるのだろうか。こうした問題意識をできるだけ多くの人と共有し，“ソーシャルインクルージョン”や“ユニバーサルデザイン”に向かうための議論，再考ができればと

思って本書を刊行するに至った。

## 本書の目的

そこで本書の主な目的は第1に、障害者統計に関する国際的文書・データを用いて障害者ジェンダー統計の国際的動向を把握すること、第2に、国際的な障害者ジェンダー統計に関して日本の研究者らはどの程度把握しているのかを明らかにすること、第3に、主要先進諸国の障害者ジェンダー統計の特徴を整理し、日本への示唆を得ること、第4に、障害の医学モデルから社会モデルへの転換に際して、障害者ジェンダー統計における新しい統計データの分析の方向性を示すことである。

研究方法は、障害者統計・障害者ジェンダー統計に関する内外の文献、国際的文書、翻訳を含む日本語文献及びインターネット検索により情報を収集し、目的に沿って比較検討を行うことである。使用した主な文献は、国連、国際障害者 NGO、ワシントン・グループによる資料、各国の障害者統計・障害者福祉に関する文献である。

## 本書の構成

本書は以上の目的を達成させるために、いくつかの工夫を行っている。まず本書は、冒頭から通読していただくことで、なぜ「障害者統計」にジェンダー視点が必要なのか、そして統計データがどのような場面で使われるべきなのかということが理解できるように構成されている。具体的な各章の構成は以下の通りである。

序章では、障害者ジェンダー統計に求められる視点ということで、第4回世界女性会議、女性差別撤廃条約等の国際的文書から確認できる内容を整理し、障害者統計にジェンダー視点を入れる際にどのようなことをポイントにおく必要があるかを解説している。それから、この章では、従来の障害者統計になぜジェンダー視点が入らないのかということについて分析している。

第1章では、国連統計委員会の下におかれているシティ・グループの一つであるワシントン・グループの取り組みが中心となるが、国際的な障害者統計の取り組みについて述べている。国際的な障害者統計は2000年以降から取りま

れているが、特にワシントン・グループの取り組みが今後の統計整備の鍵を握っている。したがってこの章ではワシントン・グループの取り組みを中心に解説を行っている。

第2章では、アジア地域における取り組み及び日本国内における障害者ジェンダー統計の整備状況をまとめている。国内の整備状況に関しては、既存の政府統計を中心に引き上げ、最後に日本国内で障害者ジェンダー統計を充実させるために必要なことについて筆者の考えを述べている。

第3章では、障害者ジェンダー統計における主要先進国論議としてカナダとアイルランドの取り組み状況について報告している。カナダは障害者統計の蓄積が他国と比べて豊富にあり、近年は障害者統計にジェンダーの視点を取り入れた障害者ジェンダー統計を整備し、世界を牽引している。アイルランドは障害問題に限らずジェンダー課題に多くのアプローチを試みている国である。近年は障害女性に関して取り組みを行っており、その取り組みには日本も学ぶべき点がいくつかある。

第4章では、これまでの筆者の研究領域の中心であった高等教育への障害者のアクセスについて、障害者ジェンダー統計視点から分析・考察を行っている。大学の大量化により、障害者の高等教育へのアクセスは重要な政策課題の一つになりつつある。それを踏まえたうえで、高等教育へアクセスする障害者の実態をつかむために障害者統計に加えてジェンダー視点を取り入れ分析・考察を行っている。

第5章では、地方自治体における障害者ジェンダー統計として、東京都の障害者調査に焦点を当て、分析・検討を行っている。今回引き上げる東京都の障害者調査はウェブサイト上にその詳細を分析した結果をデータ公表している。そのため日本の地方自治体統計では最も優れているデータの一つと思われ、そこで課題としてあげられる障害+ジェンダーの課題にはどのようなものがあるかを検討している。

第6章では、災害・障害者ジェンダー統計研究を今後展開していくにあたり、まずは災害領域において障害とジェンダーの研究がどの程度あるのかを先行研究を整理したうえで、今後の研究の展望を述べている。近年、自然災害は増える一方である。自然災害時には、障害者や高齢者、そして女性は災害時により

強いニーズを持つことになるはずだが、実際にはどのようなニーズがあるのか、その全体像はつかめていない。しかし今後も災害が増えることは予想されており、災害に関する統計を障害者や女性の観点から整備していくことは大変重要である。

第7章は補章的な位置づけとなるが、筆者の実践的な経験を取り入れ、社会福祉教育にジェンダー視点を取り入れることの重要性を述べている。そして学びをソーシャルワーク実践に生かす視点が示されている。

本書は全体を通して、障害とジェンダーの2つの視点からアプローチした研究となるが、両者ともその表面的な課題のみ取り上げることは筆者のこれまでの研究経緯からなるべく避けるかたちをとっている。いうまでもなく、障害者問題やジェンダー問題はその一面だけでストーリーが語れるほど単純な事象ではない。私たちを取り巻く現代社会はいかにわかりやすく相手に物事を伝えるかといったことに重点がおかれがちであるが、本書のテーマである障害とジェンダーは、わかりやすさだけでは伝えられないし、逆をいえば非常に複雑な事象を含む研究領域であることをここで改めて強調しておきたい。このことは、物事を効率的にかつ合理的に捉えることが重要であり、そのほうが正しいとされる現代社会においては、やや受け入れがたい部分もあるだろうと思う。そのことは筆者自身がよく理解している。それでもソーシャルインクルージョンや障害者問題、そしてジェンダー課題に関心があるのであれば、ぜひ本書を一読してほしい。そして、本書のタイトルにある障害者ジェンダー統計に注目することが現代の社会問題をどのように解決できるのか、そして統計との接し方によっては、統計そのものが変革の道具になりうる可能性があることを個々人が再考できるきっかけになってほしいと願っている。

吉田仁美